

「経験論と心の哲学」における一人称権威概念の成立について

過能洋平(Youhei Kanou)

千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程

本発表の目的は、W.セラーズの *Empiricism and Philosophy of Mind* (1997) (以下 EPM と略記) の「ジョーンズの神話」の解釈を通じて、一人称権威 (概念) の成立が思考や感覚印象等の概念が成立する為の必要条件だと示すことである。

一人称権威は心について考える際の大前提であり、常識的な心理解の一部である。EPM の議論では、一人称権威に関することが論じられなくてはならないと思われるところで、それが論じられていない。つまり、主体が、自身の言動を自己観察して思考と感覚印象を自己帰属する段階から、自己観察なしにそれらを自己帰属し報告するようになる段階へ移行する際に、飛躍が生じている。この段階への移行を可能にさせているものが、一人称権威の成立であると発表者は解釈する。このように彼の議論を分析することで一人称権威は自己知だけでなく、言語使用、行為、認識論といった分野にも関係することを取り出せると思われる。

本発表は以下の3つの部分から構成される。

①「ジョーンズの神話」における飛躍：「ジョーンズの神話」とはセラーズが自身の主張を提示する理論的物語である。その中で彼は、思考や感覚印象といった概念やそれらに関する言葉を持たないライル人達が、それらを獲得し自己帰属し報告するに至る過程を示している。しかしながらその過程には、先に述べたような飛躍が生じていることを指摘する。

②思考に対する一人称権威の成立過程：ビショップ (1980) が思考に対する一人称権威の成立について、「専有」というアイデアを示している。そしてそのアイデアを元に少し広げることで、主体が自他に思考を帰属しその専有を前提するとき、思考に対する一人称権威が成立すると解釈できる。こう解釈することにより、自己観察なしに思考を自己帰属するに至る過程の飛躍は解消できる。

③感覚印象に対する一人称権威の成立の検討：セラーズは、感覚印象を主体の内的状態であり、思考と異なる心的枠組みだとしている。故に、感覚印象に対する一人称権威の成立過程は思考の場合と異なるのだと考える方が自然である。そこで、どのようにして感覚印象に対する一人称権威が成立するのかを明らかにし、それをもって本発表の目的を達成したい。